

漫画『はだしのゲン』を改めて読む

図書部員の先生から、以下の記事を寄稿していただきました。ぜひお読みください。

* * * * *

戦後80年を迎えた今年の夏、『はだしのゲン』を改めて読み直しました。そして驚きました。「漫画に出てくるこのセリフと、同じような言葉を、最近も聞いた」と思うことが、非常にたくさんあったのです。今だからこそ、多くの人に読んでほしいと思います。図書館に全7巻の文庫と、実写版DVDがありますので、ぜひご覧ください。

<『はだしのゲン』とは…>

作者は中沢啓治。1973～74年に『週刊少年ジャンプ』に連載後、1975年から『市民』、1977年から『文化評論』、1982～87年には『教育評論』に連載された漫画です。漫画の主人公：中岡元は、作者の体験・境遇を模してつくられた人物で、作品で描かれる世界は、作者が実際に体験した境遇がもとになっています。作者は6歳の時、広島で原子爆弾を受けたものの、学校のコンクリート塀の陰にいたことで救われます。出産間近の母は、家の2階にいたため物干し台ごと吹き飛ばされたことで、家の下敷きにならず、たまたま助かりますが、家の中にいた、父・姉・弟は下敷きになり、姉は即死。弟と父は「助けて!」と声を張り上げるも子どもの力では何ともできず、道行く人に助けを求めるもみな、自分のことで精一杯。やがて火災となり、家が炎に包まれました。母親はショックで産気づき、路上で女の子を出産するも、友子と名付けられた赤ん坊は、4ヶ月後、栄養失調か放射能の影響かわからないが死んでしまいました。父が絵描きであったため作者も主人公も絵が、好きだったようです。

この漫画を読んで、「戦争の何がいけないのか」について改めて感じました。占領、略奪、命を奪う、家を壊す、歴史や文化を壊す…などいろいろありますが、一番は「『悪いことをしてもしょうがない、かまわない』という空気感が日本全土を覆うこと」ではないでしょうか。「中国が悪い。だから土地を奪っても良い。殺してもよい」とか、「日本が大変だから土地を奪おう、持っている人たちから奪おう」という考えが認められてしまえば、「わが家は食べ物がない。隣の家にはある。だから奪おう」「自分たちは盗まないと生きていけない。他人から奪うのは、しょうがない。」「あいつらは悪い奴らだから奪ってもいいんだ」という空気感が蔓延することになります。実際、戦後の日本の様子はそうでした。人間としての尊厳を、自らなくしていったことがまずいと思うのです。

<作中に出てくる「原爆の恐ろしさを描いた小説」>

漫画の中に、平山松吉という被爆者が、自身が体験した原子爆弾の恐ろしさを次世代へ、そして世界に伝えるために必死になって完成させた本が出てきます。この本は、主人公の中岡元が「紙」を手配してくれる人(元たちはとにかくお金がないので、工面してくれる人を探します)、「出版」してくれる会社(結局、刑務所の囚人に業務として安く頼みます)を自分の足で探し出し、平山さんに書いてもらったものです。平山さんは話を書き上げたところで息を引き取り、本の完成を見られずに亡くなります。元たちがこの本を広めようとすると、検閲されて役人に捕まり、「原子爆弾に関する本・情報を広めることは禁止だ」と咎められるのです。

この小説の内容を読むだけで「いかに原子爆弾が恐ろしい兵器であるか」「被爆者たちが辛い生活を送っていたか」が伝わってきます。以下、句読点など加筆しながら載せますので、ご覧ください。

<平山松吉の小説>

(アメリカは)地獄行きの切符を、約40万人の広島市の人たちへ、一個の原子爆弾にこめてばら撒いたのです。リンが燃え狂った巨大な光の輪と、5000度以上の熱線を拡げ、届けられたのです。すさまじい爆風と、いつまでも人間の体を苦しめる「放射能」という悪魔の病原体をまき散らして。

地獄祭りの景気づけのように、巨大なキノコ形をした雲がわきあがり騒ぎたてました。その雲の下では、地獄の底へ送り届ける人たちを満載した列車が、フル回転で往復していたのです。

私は塀のかげにいたため、150mほど吹き飛ばされただけで命は助かったのですが、他の人は、見る人見る人みんな人間の姿じゃなかったのです。爆風で衣服をはぎ取られてハダカ同然となり、眼球は飛び出し腹が裂けて腸が垂れ下がり、ガラス窓が粉々に碎けて全身に突き刺さり鮮血が吹き出し真っ赤に染まっていました。

びっしりと、肉の中に食い込んだガラスの断面で、入れ墨のように青くなり、体を動かすとガラスが触れ合ってジャリジャリと音を立てていました。いかにすごい爆風だったかわかります。

次に見た、別の人々の群れには、さらに驚かされました。どの人も指先に50cmくらいの紙を垂らしているのです。不思議に思ってよく見てみると、紙ではなく腕の皮膚が熱線で溶けて肩からめくれてたれ下がり、指の爪で止まっているのです。背中の皮膚はふんどしのようにたれ下がり、足の皮膚は踵で止まり、のろのろと幽霊のように両手を前に出して歩いています。手を下げると、腕の皮膚が地面を引きずるのです。

特に、黒い衣服を着た人はヤケドがひどかった。ふくしゃ熱で、服の柄が肉体に焼きつくほど焼けこげていました。白い服を着た人は、その部分が完全に残っていました。白は熱線の光を反射させていたのです。ものすごい高熱の光だとわかります。

私は家族が心配で、我が家に向かって走りました。そして次々と変わる、地獄の舞台を見たのです。方々の家の下から、助けを求める声があふれていました。私は一人でも多く助け出してやろうと思って頑張りました。だが折れ重なった材木の重みは、私一人の力ではどうにもなりません。火が火を呼んで熱風を巻き上げて、たちまち広島市は火の海に変わっていきました。全ての家が爆風でおしつぶされて、家の中にいた人は下敷になり、熱線で家に火がつき地獄の火あぶりが始まったのです。

私は助けを求める声に耳をふさぎ、念仏を唱えて逃げました。すでに我が家の方向は火で埋まり近よれず、家族がみんな無事であることを願って、私はただひたすらに猛火をかいくぐって逃げました。川に飛び込んで火を逃れ、夢中で迫ってくる地獄の使者から逃げました。熱線でヤケドした人は筋肉がひきつって泳げず、次々と川の中に沈んでいきました。爆心地に近い樹木の枝には、爆風でふきとんだ死体が突き刺さっていました。

やっと地獄の底からはだし、郊外にたどりついたのは夜の8時ごろでした。広島全体が燃え狂い、電気は消え、真っ暗でも燃える明かりでまわりの様子がはっきり見えました。竹やぶや畑の中は、ヤケドでただれ、動けなくなった人があふれていました。そして一つの合唱が始まったのです。「水～、水～」と。ヤケドで乾ききった体が、本能的に水を求める声でした。すでに死んだ母親の乳房を、腹をすかした赤ん坊が吸い続けている姿がたまらなくかわいそうでした。救護所の薬はたちまちなくなり、アカチンすらつけてもらえず、肉親の名を呼びつづけて、地獄の底へ向かって死んでいく人であふれました。

一夜明ければ見渡す限りの焼け野原となり、ただ目につくのは死体ばかり。焼け跡に転がったたくさんの小さな水槽には、火に追われ、逃げ込んだ死体がいっぱいありました。死ぬ最後まで子どもを守ろうとして両の腕にしっかりと子どもを抱きしめた母親の気持ちがあふれた死体に私は泣きました。川は死体でうまり、潮の満ち引きで行ったり来たりしていました。

軍隊や消防団の死体整理がはじまり、魚河岸のマグロのように死体が並んでいました。そして死体を積み重ねてガソリンをかけ焼くのです。何千人、何万人、毎日毎日…。肉親の死体を探し求め、見つけ出した人たちが自分の手で焼く煙が立ち上ります。いく筋もいく筋も。私は、家族は生きていると信じて救護所を探しまわりました。どの救護所もヤケドのウミや傷から立ちこめる匂いで吐き気がします。ヤケドの体にはウジがわいて這い回り、痛くて痒くて苦しむ声があふれていました。ウジを割り箸でつまみだし、死を待つだけでした。

広島市の焼け跡には、ものすごいハエの大群が発生しました。いかに多くの死体が埋まって、ウジがわきハエになったかがわかります。白い服には、あっという間にハエが群がってきて、黒い服にかかります。まるでハエに食い殺される気持ちがありました。だから焼け跡を歩くときは両手にタオルを持って、体を叩きながら歩くのです。

私の家族は見つからず、自分の家の焼け跡を掘り返してみました。そして全員の死体を見つけました。いっぺんに下敷きにされ、焼かれていたのです。この日から私の時間はとまり、季節もなくなりました。全てを奪われたショックで、夢も希望も砕けました。しかし、全てを奪い尽くした原子爆弾の地獄祭りは、まだ終わっていなかったのです。

放射能という置き土産を、雨に混せて振り撒いたり地面の中に染み込ませ、祭りの後も楽しんでいたのです。放射能は死体整理に駆けつけた健康で元気な軍人や肉親を探しにきた人たちの体に食い込み、下痢を起こさせ、急性の白血病やガンにして、じわじわと地獄の底へ引き込むのです。やっと希望を見つけ出して生きようとする人たちを逃さないのです。優しく可愛い顔に、ケロイドの爪を押し立てて歪めいつまでもいつまでも苦しめます。

私の体の中にも入り込み、地獄の底へ引きずりこもうとしています。私は戦いました。人骨の粉を飲めば助かると言われたら信じて飲み、酒を思い切り飲めば助かると言えば酒を飲み、あらゆることをやってきましたがもうダメです。力尽きそうです。どうか私に代わって原子爆弾という地獄の使者を叩き潰してください。私は許せません、原子爆弾を。許せません、戦争を起こし原爆を落とし、地獄の使者の手先になった日本人もアメリカ人も。許せません、全てを奪い尽くすピカドン。

この地球に生きている人たちよ。みんなで声を張り上げ、地獄の口を塞げ。早く早く。2度と地獄の底をみないように力を合わせよう。なんと人間は愚かなのだ。いつもいつも戦争にあけくれ、地獄の人殺し兵器を作り、増やすことにあけくれて、もうそんな世界は終わらせよう。みんなが知恵を傾けて。

原爆被害にあった作者の思いが、強く込められた24ページでした。実際に見ていないと、体験していないと描けない、貴重な資料と言えます。ぜひ、戦後80年の今年だからこそ、皆さんに読んでほしい本です。



図書館Instagramはこちら⇒

TAKAKURA_LIBRARY

戦後80年
企画

特別講演会

—「より良い将来に向けて努力する」ために—

2025年11月4日(火) 16:00~17:00

場所： 図書館2階・多目的コーナー



演題

フランスの第二次世界大戦と
戦後80年

講師

南 祐三 准教授

(南山大学国際教養学部)

一般的に、フランスは第二次世界大戦の戦勝国として認識されています。しかし実際には、1939年9月1日の戦争開始から45年5月のドイツ無条件降伏までの5年以上の歳月の大半を敗戦国あるいは中立国として過ごしていました。40年6月の時点でドイツに降伏し、以後約4年間はドイツ軍の占領下に置かれていたからです。じつはフランスは第二次世界大戦において、交戦国、敗戦国、中立国、戦勝国と様々な立場を経験しています。この経験はフランスの戦後政治・社会でどのように受け止められ、歴史認識にどのような影響を与えたのでしょうか。この講演では、単なる戦勝国ではなく、また日本のような敗戦国とも異なる経験と記憶をもつフランスにとっての第二次世界大戦と戦後80年について考えてみたいと思います。

講師略歴：1979年生まれ。2012年、早稲田大学大学院文学研究科単位取得退学。
富山大学人文学部准教授を経て、2023年より現職。博士（文学）。

<問い合わせ先>

○花田先生(中学部)

○齋藤先生(図書館司書)